

活殺術と気合術の身体運動理論と生体計測

○露木博正（心体能力開発研究所・早稲田大学大学院情報生産システム研究科博士後期課程）

わが国には、古来より「活殺自在」、「活を入れる」という言葉がある。これは古武術や禅、神道において用いられた意味深い言葉であるが、「活殺術」、あるいは単に「活法」と呼ばれる古武術の医術、蘇生術と武術の両面性をもつ技術体系の具体的な理論と方法は歴史的に門外不出のものとして秘匿されてきた。さらに流派によってその意義、理論は少なからず異なり同時にその技術的レベルも差が大きいという文化的特徴もあった。

そこで今回はその身体文化と身体運動における流派の相違をこえたところの活殺術の共通文化としての部分を眺め、私自身が伝承技法を元に研究してきた運動理論と技術を説明する。また「活点」と呼ばれる身体の急所への刺激によってあらわれた生体の変化を生体電気信号の計測結果によって発表したいと思う。

次にこの「活」を生み出す根源であるハラあるいは丹田について言及し「気合い」という心身現象、身体運動のメカニズムについて説明したいと思う。ハラは一般言語として日本語に根をおろし理知や理性とは異なる次元の身体感覚言語として根を下ろしてきた。ハラという心身未分化の言語は「腹芸、ハラをきめる、ハラを割る、ハラをくくる」等々のように人間の本心、無意識などの心、精神の問題と同時に生命力高

揚、医術の急所としての重要箇所であり、さらに能、舞踊、茶の湯、武術などの諸芸の身体技法の上達構造における中心課題としてとらえられてきた。「気合い」を生み出すのはこのハラである。

このハラというものは生体物理学的にはCenter of gravity for a person(人体重心)と一致すると考えられる。ハラは養成と強化は健康養生、能力開発、運動能力の向上と深く関連するととらえられるがこのハラと気合い現象を、呼吸運動を中心として生体力学と運動エネルギーの視点から考え、最終的に活法との関連について発表したいと思う。